52
631

015919-000-8

特66-677

忠実勇武

赤松　連城／述

M28. 4

ABC-1738

消息

本文はたび本願寺大法主の征清陸海軍人諸士に對して特に示し玉ひたるものなり。

日月の遷り易き速にして。諸子が出征の途より上られしより以來。とハ。白駒の隙を過ぐるよりもはや已に半年に滿んとす。爾來日として諸子の勞苦を思はざるの日なく。時として諸子の艱難を慮らざるの時なし。風に月に身は内國にありながら。心ハ諸子の身邊を纏ふて。只管其健康を

祈り。切に其功勞を謝する所なり。殊に夏去り秋過て。今や凛烈の沍寒に向はんとするの候となりぬれば。風土の變はいふも更なり。寒威の酷甚しきことゝ。遥に内國に數倍するの異域に暴露し。風に櫛り雨に沐し。海面に陸地にいふべからざるの艱難を累ね。一意專心山岳よりも重んぜべきの義をわきまへ。鴻毛よりも輕ぜべきの死を決し。夙に夜に帝國の威武を輝かさるゝの功勞を想へば。寢食も爲に安からざることに候へ

ば。予も此際一たび渡航して。親しく諸子を慰問し。法義の上より臨戰の心得をも篤と申し聞かせ度と存ぜれども。内國に在ても事務多端の折柄なれば。未だ其運びにも到り難し。依て不本意ながら書取を以て其筋へ申し送ることゝせり。能々聞取らるべく候。

抑今回日清の戰爭は。吾帝國未曾有の事變にして。國家の安危　皇威の消長も。此一戰の勝敗如何によりて分るゝ儀に候へば。苟も帝國の臣民

として。祖先以來二千有餘年間。世々、皇室の恩澤を蒙りたる者は。いかでこの際よ當て。報國の誠を致さゞして可ならんや。殊に陸海軍人諸士は。其職分直接に攻守の任に當て。國家の柱石となるべき者なれば。愈々もて平生養ひたる武勇を振て。身命を惜まゞ。專心に奉公せざるべからざる儀よ候。

さりながら。未來後生の一事に就て。うつくしく決定する所なければ。砲烟彈雨の間に立て。やゝ

もすれば疑懼躊躇して。不圖平生の所懷よ負くことなを保し難し。されば後生の出離を決定し置くこと。現に戰場に向はれし陸海軍人諸士の身上に於ては。最大肝要の事よ候なり。さて後生出離の要は。吾宗の教義に於ては。平生示し置しが如く。阿彌陀如來が曾て吾等凡夫のために。勇猛精進にもろ〳〵の善行を修して。超世の願力を成就し玉ひしに由て。我等衆生は毫末も自身に修行することを要せゞ。彼の願力を信ぜる

一念に。萬善萬行其身に圓滿して。往生淨土の業事成弁する儀に候。かゝる殊勝のいわれなれば。深く願力を信じて。未來の出離に就て一念疑懼の心を挾まぎ。身終れば卽時に淨土の妙果を證することゝ喜つゝ。陛下の曾て軍人へ下し玉ひし。詔勅の趣意を体認して。忠孝節義を重んじ一死國に報ぎるの覺悟に住して。已を忘れて無二の奉公を致し。以て上陛下の宸襟を安じ奉り。下四千万同胞國民の望に答へらるべく候。猶

此上には深く衛生に注意して。異郷瘴癘の氣に犯されぎる樣。能々自愛せられ候て。東洋平和の大局を全ふし。凱歌と倶に歸朝せらるべく。祈る所に候なり。

忠實勇武

眞宗末學　赤松連城述

遠征軍人の艱苦をおもひやりて、種々の物品を恤兵部に献ずる者、陸續として絶えず、これみな相愛するの仁と、公に報ぜるの義とにかなひ誠に美事といふべし、このころ婦人妙好會より、旦が佛敎のたふとき理を述べたる小冊子とれくゝ、軍人の精神を慰めんとて、余に筆をとれよとゝはる、その理

の深きことゝ固より小冊子の盡すべきにあらねば、いさゝか軍人に重要の關係ありとおもふ節々とかき記して、以て恤兵の一端に供ふ、宗教者自ら信ずる所と推してこれを人にすゝむるゝ忠實のこゝろにして、これを爲すに憚からざるゝ勇武の志とゞいふべければ、名けて忠實勇武といふ、忠實勇武の四字ゝ、我邦臣民一般の特性にして、たび征清の義戰にゝて、世界の歷史上に見ることゝ希なる大捷と得たるゝ、この特性の外にあらはれたる功蹟なるべし、既に明治廿二年の紀元節、憲法發布の大詔にも、忠實勇武なる臣民の子孫なることと回想して仰られ、昨年八月宣戰の詔勅にゝ、初に忠實勇武なる汝有衆に示すと仰られ、終にゝ汝有衆の忠實勇武に依賴し、速に平和と永遠に克復し云云と宣はせたれば、平時も戰時も一般の臣民この特性と培養するに怠るべからず、殊に戰時にあり軍人にあ[illegible]ては、しばらくも忘るべからざる大事なり、さかるにこの忠實勇武の氣性ゝいのよして生ずる

かゝいかにして養ふべきかといふに、我邦にハ神儒佛の三道ありて、久しく並び行はれて相悖らざ、神道とハ皇祖皇宗の御遺訓にして帝國固有の國体なり儒道とハ仁義禮智孝悌忠信の名教なり、皆忠實勇武と生養する者にあらざるはなし、わが佛教もまた忠實勇武と養ふについて大に關係する所あり、今いさゝかこれを述ぶべし、

抑忠實ハ体にして、勇武は用なり、忠實なる者にハならざ勇武のはたらきあるべき事なれば、分つべ

きにあらざれども、しばらく体用の順序にまかせて先忠實の二字を解き、後に勇武の二字を述ぶべし忠實といふハ忠ハ中心の二字をあつめたる文字にて心の中につゝみかくすことなく、少しもかざる事なく、聊かいつはる事なきこゝろなり、これを言語にあらはせば信となる、故に忠信とつゞくこれをもて人に交れば恕となる、ゆへに忠恕とつゞく、實といふは虚に對す、中に實のなきを虚といひ、之に反するハ實なり、又華に對す、華ハ花の色香さきいでゝ奇麗なれ

ども、實にあらざれば用となさず、故にうはべのみと
かざると浮華といひてきらふなり、明治十五年一月
の勅諭に、心誠ならざればいのなる嘉言善行も、皆
うはべの裝飾にて、何の用にかは立べきと戒めたま
ふれてのていろなり、わが佛教い心と治むるを本と
し、至誠眞實にして內外相應すべきことを教へたま
へり、大經にい心口各異にして、言念實なきを戒め言
行忠信にして、表裏相應なれと勸めたまふ、何故に
心口各異となり、人といつはり、人を欺くや、よく〳〵

考へさるべし、是みな我と他との分隔をずる執情より、人をうらやみ、人とそねみ、我物とねたしみ他の物をむさぼる等の、種々の煩惱おこるより、不忠の心不實の行い生ずるなり、親しき父子の間よりいつはる者もなく、欺くよともなし、ねたむ心もおこらねど、むさぼる心もあるべき筈なし、父子すら此の如し、況やわが一身にたいて、右の手と左の手の間にい、貪るこゝろおこらねども、相たすくるのはたらきい誠に深切なり、右の足と左の足の間にい、瞋るこゝろはおこ

らねど、相いたはるの情い誠に篤し、これ同一体にして隔なき故なり、佛い大慈大悲を以て一切衆生を視るを身己の如しと、同体平等の慈悲を行ひたまふ故に、眞實ならぎといふみとなし、近く勅諭の中についてこの理を示さば　朕い汝等を股肱とたのみ汝等は　朕を頭首と仰ぎてぞ、其親はことに深かるべきと仰られたり、是　天皇陛下の一視同仁即ち同体の大慈あり、唯内國四千万の人民のみならず、朝鮮の獨立を保たしめ、東洋全局の平和を維持せんとの至

仁至慈の大御心い仰ぐに餘ある御事なり、しかれば各自一己の私を顧みぎ、大元帥陛下を頭首と仰ぎ奉り、人民相互を左右の手、右左の足、相うべりを相愛するに於て、忠實の氣性い自ら養かるゝなり、是佛教の我執を戒るの教、慈悲を尚ぶの教、内外相應を勸るの教、一として忠實の基礎に非るいなきあり、次に勇武といふい、言語動作にあらはるゝい末よりぎ、不撓不屈は精神い其本なり、已に忠實の心堅固なれば、いかなる艱難に逢ふとも決して屈することな

し、凡事と決行せんとするに妨害となる者い外より來る妨よりも、内より生ずる害に注意せざるべからず、大丈夫い富貴の爲にも淫せられず、貧賤の爲にも移されずといふ、是内に富貴を貪るの慾心なきが故に外より貧賤の爲に迫られても、心の移るといふてとなしなり、孔子申棖といへる人を評して棖也慾なり、焉ぞ剛と得んといへり、是慾あれはその爲に屈する事あり、撓む事あり、堅固なる事能はずといふの戒なり、わが佛教は貪慾の煩惱は特におれを戒めたま

ひ、常に慈悲を行ふべしと勸めたまふ、慈悲より勇氣の生ずるは、たとへば俄に火災の起りたる時、我兒と見失ひたらんには、其母火の恐るべきと忘れ、それと火の中より救出すが如く、非常の勇氣い至重の慈悲の爲に生ずるなり、是即ち忠實の休よと勇武の用よりならはるいすがたといふべし故に佛道を行する者い、難難を厭はず、身命と惜まず、勇猛精進なるべし、畢竟難難とはいかるは、身と愛し命と惜む故なと已に身命と惜まざればいかなる難難も忍耐し得べし、是

佛教の貪欲を戒る者慈悲を尚ぶ者勇猛精進を勸む
る者、一として勇武の基礎に非るはなきなり、
佛教の本旨此の如くなれば、忠實勇武の氣性を養成
するにあづかりて、大に力ある者なれども、これを修
するに種々の法門あり、自力によるあり、他力を仰
ぐ者あり、今我奉ずる往生淨土の法門は、他力にして
修し易く、其利益を得ること甚速なりと信ずると
以て、粗その大意を述ぶべし、
他力といふは阿彌陀如來の本願力なり阿彌陀とい

ふは梵語にして、无量壽と、翻じ、無量光と、譯す即ち壽
命かぎりなく、三世を貫き光明ほとりなく十方を照
したまふ御佛なり、さてその本願といふは、この佛因
位にありて法藏菩薩と申せし時、佛になんとて廣
大の願をおこしたまへり、即ち一切衆生のありさま
を見たまふに貪欲瞋恚等の諸の煩惱みちゝて淸
淨の心なく、眞實の心なし、それが爲に種々の惡業を
作り、迷ひの境界を離るゝあと能はざるとのはれみた
まひいのにしてもさすけんと久しき御思案の上よ

として、回向と首として大悲心と成就すと菩薩の方に万善万行と修したまひ、その功徳と我等にあたへて、たすけすくはんと誓ひたまふ、是誠に世に希なる殊勝の本願なり、而して兆載永劫といへる久しき間煩悩と斷じ功徳と積み、遂にその本願を成就し、阿彌陀如來とならせたまへり、この佛の本願を南無阿彌陀佛といふ六字の名號にあらはしさまふ、これを本願の名號といふなり、我等の心中には煩悩みち〳〵て、これを斷除することと能はざれども、この佛の名號

と聞き、この佛の本願と信ぜれば、佛より功徳とあたへたまふ故に、佛より煩悩と消滅したまふ、たとへば病重き者、自ら其苦と離るゝこと能はざれども、一たび良醫の妙薬と服すれば、藥功身にみちて、病苦れのづから除かるゝごとし、されば本願の名號い救急の良藥なり、これと他力といふ、

この本願を信ぜるといふい、いかやうなる事ぞといふに、更に何のひづらひもなし、自力と捨て他力に歸するばかりなり、先わが身は煩悩具足せるあさまし

き者にして、自ら迷を離るゝおとゝなはぎと信ずるこれ自力を捨るなり、かゝるあさましき者をたすけんとて、發したまへる本願なれば、この願力にまかせ奉れば、必ぎたすけらるゝと信ぎる、これ他力に歸するなり、我心中のあさましきを、つくろはぎかざらぎして、そのまゝ佛にうち明すは、表裏なきすなはちこゝろにして、佛の願力にまかせていさゝかも己がはからひとましへぎ、心のそこにつゆばかりも疑のおゝろをのこさねば、私なきまゝとの心なり、故にこれを信心といふ、この信心の生ずるは即ち佛の大慈悲心の清淨眞實なるが、我等の心中に徹りたるなり故に佛心を我等にさづけたまふとき、信心とはいはるゝなりといへぎ、清淨の心なき我等に、清淨の信心れこり、眞實の心なき我等に、眞實の信心生ぎ、これ佛はあたへたまふところなるゆゑ、如來回向の信心もいへり、此信心即ち佛果にいたるべき正因にして迷とはなるゝ忠實心なり、此信心一たび生ずれば、貪欲の水も穢すこと能はぎ、瞋恚の火も燒くこと能は、

を故に煩惱のおこるにつけて、わさましやとふりすてゝこれを顧みず、正直に進みて、すこしも怯退の心なし、即ち淨土におもむく勇武心なり、この熊谷直實入道が東くだりの時、さかしまに馬にのりて淨土にゝ剛の者とや沙汰すらん、西にむかひてうしろむけねば」と歌よみけるゝ、入道已前の勇氣一轉してゝらはれたるべし、この本願のことゝりは六字の名號にあらはれされば常に佛恩を忘れをして、其名號を稱ふるゝと、誠に修し易き法門なり、これを報恩の念佛といふ、されば佛の本願即ち平等の大慈悲心に任せ奉り、いさゝかも私意とまじへざるは忠實にして、死の緣さまゝくなれば、彈丸雨注の間に斃るゝとも、淨土に生をるゝと疑なしと、死と恐れざるゝ勇武あり、軍人としてよくこの安心に住する時ゝ一すべし、大元帥陛下の詔勅に隨ひ長官の指揮に一任し、いさゝかも私意とまじへをいかゝる艱難とも、はゝからざる忠實勇武の氣性はるかに常人に卓絶する所あるべし

（終）

明治廿八年四月十二日　印刷
明治廿八年四月二十日　發行
（定價壹錢五厘）

著作者　京都市下京區蛭子水町第拾二番戸　赤松連城

發行者　大阪市西區京町堀上通四丁目百四拾八番屋敷　爲貴七覺

印刷者　大阪府東成郡天王寺村大字天王寺二千二百五拾六番屋敷　森祐好

發行所　大阪西區京町堀上通四丁目順正寺内　眞宗婦人妙好會

第一回陸海軍に寄贈冊子有志者人名

壹千部　婦人妙好會傳道部
同　同　主計部
同　同　江下四　三宅フミ
三百部　江子島　宮崎ツヤ
貳百部　京上四　爲貴ヒデノ
壹百部　勒上三　平岡ミト
同　ナヤ町　中野ステ
同　安治川南　盤谷アイ
同　立賣堀南　蒲田マキ
同　中ノ嶋七　高麗トメ
同　堂ジマ　小今井ヨヲ
同　トイヤ町　八木トヨ

壹百部　清水町　中キク
同　薩摩堀　高橋タイ
同　江下三　三宅テイ
同　新ホリ　山田ナカ
同　新町　小田ヨヲ
同　安土町　大田ヒロ
同　南本町　村井貞松
同　本田三　村上ヒサ
同　本町四　福元セイ
同　備中玉島　犬飼利平
同　大阪共和會
同　江戸堀　青筵講

五拾部 江下四 平野ミヲ子
同 同 濱生ウタ
同 三 山内クラ
同 同 安達ミツ
同 西 辻ナヲ
同 北堀江 小西ヒサヨ
同 南安治川 藤本イヱ
同 同 長尾ユキ
同 新町 澤井マツ
同 同 梶田キミ
同 同 華隈シカ
同 江南四 長江ハナ
同 宇和嶋バシ 内海アツ
同 駒下一 松井フサ
同 新ホリ 清水ヒサヱ
同 京上三

五拾部 京上二 服部ノブ
同 江南三 植木マス
同 本田三 村上キシ
同 本田二 乾ナチ
同 梅本町 牧田キヌ
同 唐物町四 伏見クメ
同 本町四 藤井リウ
同 北久寶寺町 室崎ヤス
同 本町四 安藤ハマ
同 安堂寺町 楠ヒデ
同 江下二 永田松次
同 北堀江 潮江儀助
同 同 新保專助
同 土佐堀 川庄到
同 築島ノブ

四拾部 同

三拾部 江下四 矢野マツ
同 同 宮本クト
同 江北二 綴喜ツル
同 同 同ウコ
同 江下四 貴志エイ
同 同二 肥後エイ
同 駒上三 平岡シナ
同 日向町 石原タツ
同 駒南五 佐賀モト
同 京町四 友金ウノ
同 高麗五 小川コマ
同 本田二 播本ムメ
同 江北二 松本キク
同 江南四 管チヨ
同 高瀬セイ

三拾部 江南四 山田ヤス
同 同 恩地ナラエ
同 中ノ嶋 筒井ヤエ
同 同 備中ツル
同 富ツマ 小西ショシ
同 南本町 福田ション
同 駒下二 板倉フサ
同 京上二 祝ユウ
同 京町堀 平田サツ
同 阿波座 小松トミ
同 備中玉シマ 犬飼惠助

（以下次回）

2-R-96